

公表用要約データ

論文題目 ポール・ヴァレリーの『旧詩帖』

氏名 鳥山定嗣

本論文は、19・20世紀フランスの作家ポール・ヴァレリーの詩集『旧詩帖』(*Album de vers anciens*)を対象として、全21篇の翻訳・注解・草稿研究を行うとともに、ヴァレリーの代表詩篇(長詩『若きパルク』と詩集『魅惑』)および先行詩人(特に象徴派)の作品との比較を通して、『旧詩帖』の特異性を明らかにしようとした試みである。

詩人としてのヴァレリーの生涯には二つの大きな出来事、すなわち1892年の青年期危機(「ジェノヴァの夜」)に象徴される詩作放棄と、1917年の『若きパルク』刊行に結実する詩作回帰があるが、その詩作時期は大きく3期に分けて考えることができる。まず、12歳で詩を書き始めてから「ジェノヴァの夜」を経て20代で詩作を断念するまでの初期。次に、およそ20年に及ぶいわゆる「沈黙期」(私的な制作の試みは継続するがほとんど作品を公表しない時期)を挟み、40代にして再び詩作に回帰し、『若きパルク』、『旧詩帖』(1920年初版)、『魅惑』(1922年初版)を立て続けに発表する円熟した中期。最後に、50代後半から、公的な作品としては韻文詩から散文詩や劇作品に移行する一方、晩年の愛人に宛てた私信には数多くの恋歌(韻文)をしたためる後期である。このように分けると、『旧詩帖』は特異な位置にある。というのも、この詩集に収録された詩篇の大半は、ヴァレリーが20歳ごろ雑誌発表したものに、後年40代を過ぎてから改変の手を加えたものであり、上記の区分でいえば、初期と中期の両方にまたがっているからである。この特異性によって、『旧詩帖』という詩集は主に次の問題点を孕んでいる。

1. 初期詩篇に対する後年の改変

『旧詩帖』に収められた詩篇の多くは初期詩篇の改作であり、詩篇によっては旧作と改作との間に少なからぬ異同が見られる。また、一口に旧作と言っても、1890年代に雑誌発表された初出テキストのほかに、1892年ピエール・ルイスとアンドレ・ジッドに贈った自筆自撰詩集(ルイスに贈られたものは今日所在不明であり、ジッドに贈られた『彼の詩』のみが知られる)や1900年代に刊行された同時代の詩のアンソロジー(1900年刊アドルフ・

ヴァン・ブヴェール、ポール・レオトー共編『今日の詩人たち』および1906-07年刊ジェラルド・ワルク編『現代フランス詩人選集』に収録されたものなど、『旧詩帖』に収められるまでに幾つかの異文が存在する。若書きの作に後年ヴァレリーが施した改変のありようを正確に把握するためには、それらの異文を比較するとともに、フランス国立図書館所蔵の草稿群（『旧詩帖』関連草稿および「旧詩」関連草稿）を参照することによって、各異文・各草稿間の段階的変化を明らかにする必要がある。また、『旧詩帖』という詩集には版を重ねるにつれて収録詩篇が増補されていったという経緯がある（1920年初版には16篇所収、1926年再版で4篇増補、1931年版で1篇増補され、最終的に全21篇となる）が、詩篇のなかには初版以降も改変が続き、1926年の段階で新たに詩節が追加されたものや、1942年の版において大幅な加筆訂正を施されたものもある。つまり、『旧詩帖』の制作年代はヴァレリーの詩作の初期と中期にまたがるだけでなく後期にまで及んでいるのであり、「昔の詩」（*vers anciens*）を標題に掲げるこの詩集の生成過程は、実はほぼ詩人の一生涯にわたるといっても過言ではない。『旧詩帖』にはさらに、その題名とは裏腹に、『若きパルク』以後に書かれた新しい詩（後年の改作ではなく、まさしく後年の作）も含まれ、「昔の詩」の擬装という問題もある。『旧詩帖』は字義通り「昔の詩」を集めた「アルバム」ではなく、そのようなものと詩人が見せようとした詩集なのである。

なお、『旧詩帖』に関する研究は『若きパルク』や『魅惑』の研究と比べるとかなり少ないが、『旧詩帖』所収詩篇の異文情報をまとめたピエール＝オリヴィエ・ワルゼル（1953）の先駆的研究に始まり、この詩集を正面から取り上げたものとして、特にチャールズ・ホワイティング（1960）とスザンヌ・ナッシュ（1983）による研究が挙げられる。が、前者は『旧詩帖』所収以前の旧作を対象を限り、後者は『旧詩帖』初版を主な対象とするというように、考察対象をある時期に限定してしまうという問題がある。また『旧詩帖』の幾つかの詩篇については、1970年代、ジェームズ・ローラーやジャン・ベルマン＝ノエルによって草稿読解がなされたが、『旧詩帖』全体としてはこれまで関連草稿が十分に活用されてきたとは言えない。以上の点を踏まえ、本論文ではフランス国立図書館所蔵の草稿群を参照しつつ、初期詩篇の段階的改変についてさらに綿密な分析をした。

2. 『若きパルク』との関連

『旧詩帖』における後年の改変という問題はまた『若きパルク』との関連においても考察されなければならない。というのも、『旧詩帖』所収詩篇が推敲された時期は『若きパルク』

の制作時期と重なっているからである。フロランス・ド・リュシー（1975）の指摘するように、草稿を参照すると、「昔の詩」と「新しい詩」が当初から截然と区別されていたわけではなく、同時進行する生成過程のなかで今見る形に分化していったことが跡付けられる。新しい詩は昔の詩に根差し、昔の詩は新しい詩の反映を帯びている。その相互作用を捉えるために、本論文では『旧詩帖』の旧作と改作を区別したうえで、それらを『若きパルク』の決定稿と比較するとともに、両者の草稿をも考慮に入れ、生成過程から最終形態に至るまでの間テキスト性を考察した。

3. 先行作品の影響

初期詩篇の改変という問題はさらに、先行詩人たちの影響という問題を複雑化する。ここでもまた 1890 年代の旧作と 1920 年以降の改作を区別する必要があり、初期詩篇に見られる「影響」だけでなく、それに対して後年ヴァレリーが示した「反応」（ナッシュの言う「過去の変形」あるいは放置）が問題となる。

若年のヴァレリーが感化を受けた詩人としては、ユゴー、ボードレー、ポー、ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーの名が挙げられるが、その他にも、ジョゼ・マリア・ド・エレディア、アンリ・ド・レニエ、フランシス・ヴィエレグリファンなど、今日注目されることの少ない詩人たちの存在も看過しえない。またヴァレリーが 20 歳前に出会った二人の友人、ピエール・ルイスとアンドレ・ジッドとの交流も注目される。後年『旧詩帖』に収録される初期詩篇の多くは、ルイスが創刊・主宰した『ラ・コンク』誌に掲載されたものであり、また雑誌掲載以前にもヴァレリーはルイスやジッド宛の手紙に初稿を送って批評を仰ぎ、友人による助言によってしばしば詩を書き改めている。上に挙げた先行詩人の作品とともに、同世代の友人による批評や作品もヴァレリー初期の詩作に大きな影響を及ぼしている。

本論文の構成

以上の点を踏まえつつ、本論文は次のような構成のもと論を進める。

第 1 章 『旧詩帖』各詩篇の読解

第 1 章では、『旧詩帖』の各詩篇について、関連草稿を参照しつつ、翻訳および注解を行う。まず『旧詩帖』に収録されるまでのさまざまな異文を確認し、対象とするテキストを選定したうえで、特に上述した問題点、すなわち初期詩篇に対する後年の改変、『若きパルク』

との関連、先行作品の影響といった観点から各詩篇を読み解く。

『旧詩帖』所収詩篇全般に通じる改変の特徴として、特に次の点が認められた。

まず、初期詩篇に対する後年の改変は、必ずしも『旧詩帖』所収に際して一気に行われたわけではなく、機会のある度に徐々になされた段階的改変であるということ。特に、1900年刊『今日の詩人たち』に収録された詩篇については、すでにこの段階でかなりの改変を施されており、ヴァレリーの詩を初めて収録した同アンソロジーは、20年後の『旧詩帖』における改変を先取りするものと位置づけられる。また、『旧詩帖』所収以降も、特に1926年の再版と1942年の版において、新たな詩節の増補や大幅な改変が見られ、後年の改変は少なくとも4段階（1900年、1920年、1926年、1942年）に分けて把握する必要がある。

内容面（語彙・イマージュ）における改変の特徴として、まず消去された要素に注目すれば、象徴派の詩人たちが多用したために時代色を帯びた語彙や宗教色の濃厚な語彙、あるいは辞書に載っていないような稀語、また頭文字大文字・感嘆符・中断符など、要するに、装飾的要素の削減が顕著である。逆に、後から添加された要素としては、スタティックな描写に対するダイナミックな表現、ポジティブな要素に対するネガティブな要素（明に対する暗、快楽に対する苦痛、優美に対する醜悪など）が注目される。また、後年新たに詩節が増補された詩篇については、異質な要素（別の時制・人称・視点など）を組み込むことによって、全体の構成をより複合的にし、詩節間の対照を際立たせようとする傾向が見て取れる。この複合的な構成という点は、1930年代以降ヴァレリーが手がけた劇作品に通じるものと思われる。

形式面（音韻・リズム）における変化として、音韻の面では、詩句の改変によって畳韻および半諧音などの音韻効果を増す傾向が顕著である。また、ある単語や表現を変える際、通常は類義語に置き換える（言い換えれば、意味を保ったまま音を変える）が、それとは逆に類音語を探す（音を保って意味を変える）という詩に特有の現象がしばしば観察された。リズムの面では、1890年代に書かれた詩句には、伝統的な韻律を崩し、古典的詩法の要諦というべき句切りを揺るがせる象徴派風の詩句が散見される一方、後年の改変ではそうした不安定なリズムを古典的な結構に改めるという傾向が全般的に見られる。とはいえ、ヴァレリーは後年、若書きの詩に特有のリズムの揺らぎをすべて消去したわけではなく、わずかながらその痕跡を残しているという点も看過しえない。

第2章 『旧詩帖』の経緯と構成

第2章では、『旧詩帖』全体を対象として、この詩集が編まれるに至った経緯を概観するとともに詩集の構成について論述する。

まず、『旧詩帖』の経緯（制作背景および生成過程）について、1892年の「ジェノヴァの夜」に象徴される詩作放棄から1910年代の詩作回帰までの時期に焦点を絞り、当時ヴァレリーが友人や妻に宛てて送った手紙や、後年公表した「ある詩篇〔『若きパルク』〕の回想録の断片」などを参照しつつ、一度放棄した詩作に再び手を染めることに躊躇するヴァレリーを出版へと導いた諸要因を探る。また、『旧詩帖』という題名や、当初詩集の序文として構想されていた「ピエール・ルイスへの献辞」について関連草稿を紹介するとともに、この詩集の区別すべき幾つかの版について叙述する。

次に、『旧詩帖』の構成（収録詩篇の選定および配列）について、同詩集に収録された詩篇が数多くの初期詩篇群の中からどのようにして選ばれたのか、その選定基準を明らかにするために、ヴァレリーが初期詩篇を発表した媒体（雑誌およびアンソロジー）や友人のために編んだささやかな自撰詩集（『彼の詩』および『数人の友達』）を概観する。また、『旧詩帖』初版に収められた16篇の配列および再版以降増補された5篇の挿入個所について考察するとともに、草稿中に見られる「目次」草案を参照し、収録詩篇の選定過程や複数の配列可能性を検討する。さらに、この詩集の最終形態における隣接詩篇の連関性についても一考を加える。

第3章 『旧詩帖』の周辺（『若きパルク』との関連および『魅惑』との比較）

第3章では、『旧詩帖』とヴァレリーの後年の詩作品との関連・比較という観点から、それまでの考察を発展させる。

『旧詩帖』と『若きパルク』の関連について、本論文第1章において指摘した点を踏まえつつ、全512行・16断章に及ぶ『若きパルク』のうち、特に「思い出」の主題が展開される第8断章（第190-208行）をめぐって、羞恥に染まった過去に対するパルクの反応に、自らの旧詩と対面したヴァレリー自身の姿を重ね読むという象徴的な読みの射程を確認する。そのうえで、第7断章終盤（第185-189行）に注目し、「挿話」（『旧詩帖』所収）の一句を引き継ぐこのくだりが『若きパルク』において担う象徴的な機能について考察する。制作時期を同じくする『旧詩帖』と『若きパルク』の間には、単に決定稿だけでなく草稿段階における実質的な関連性が見出される。

また『若きパルク』刊行後、相次いで発表された『旧詩帖』と『魅惑』は、両詩集とも最

終的に全 21 篇からなるという点で恰好な比較対象であり、両詩集を形式および内容の両面から比較することによって、それぞれの特色が浮き彫りになる。『旧詩帖』と『魅惑』は単に古い詩集と新しい詩集として対比されるべきではなく、古い層と新しい層を複雑に含む『旧詩帖』が〈多層・不均質〉的であるのに対し、新しい詩のみからなる『魅惑』は〈単層・均質〉的であるというかたちで対照をなす。両詩集は形式面（詩型・韻律・脚韻）および内容面（主題・語彙）においてもそれぞれ異なる特徴を示し、『旧詩帖』に〈女性〉的な傾向（主題および脚韻・文法上の性）が顕著である一方、『魅惑』にはそうした傾向は見られず、むしろ形式・主題の両面における〈多様性〉が際立つ。収録詩篇の詩型や主題という点では『魅惑』の方が〈多様〉であるが、各詩篇の制作時期という点では『旧詩帖』の方が〈多層〉である。

要するに、『旧詩帖』という詩集の特異性は〈多層性〉にある。第一に、各詩篇内部に孕まれる制作時期の懸隔、つまり 1890 年代に遡る古い層と 1910 年代以降の新しい層との混淆によって多層的である。しかも、詩篇によっては、1900 年のアンソロジー収録の際に改変された中間層を含むうえ、1920 年の初版以降も晩年に至るまで改変が続いており、新旧の層が幾重にも織り込まれている。第二に、収録詩篇相互間の制作時期の懸隔によっても、『旧詩帖』は多層からなる不均質体である。1890 年代に発表された旧作のなかでも「ジェノヴァの夜」以前の作とそれ以降の作には弁別の特徴がある一方、この詩集には先述のように『若きパルク』刊行以後に書き出された新しい詩も含まれる。このように新旧さまざまな層を内包する『旧詩帖』は、まさしくその多層性により、ヴァレリーの初期詩篇群と中・後期詩篇群をつなぐものと見なすことができる。

なお、本論文末尾に、『旧詩帖』所収詩篇および公表された初期詩篇に関する情報一覧を付すとともに、『旧詩帖』全 21 篇の原詩と拙訳を添える。既訳として菱山修三訳（1942）と鈴木信太郎訳（1967）があるが、『若きパルク』と『魅惑』が度重なる訳業、特に中井久夫訳（1995）によって刷新された一方、『旧詩帖』の邦訳は 1960 年代のものにとどまっているため本論文で拙訳を試みた次第である。